

徳島市常三島遺跡 97年度発掘調査概要報告書

—総合情報処理センター等新営に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1997年10月30日

徳島大学埋蔵文化財調査委員会
徳島大学埋蔵文化財調査室

1. 調査の概要

- (1) 遺跡の名称 徳島市常三島遺跡（江戸時代武家屋敷跡）
- (2) 遺跡の所在地 徳島市南常三島2丁目1番地
- (3) 調査の理由 総合情報処理センター等新営に伴う埋蔵文化財発掘調査
- (4) 調査面積 687m²
- (5) 調査期間 平成9年（1997年）3月28日～6月10日
- (6) 調査主体 徳島大学埋蔵文化財調査委員会（委員長 斉藤史郎 徳島大学長）
- (7) 調査担当 徳島大学埋蔵文化財調査室（室長 北條芳隆 総合科学部助教授）
- (8) 調査員等 北條芳隆（主任）、上田淑子（施設部技術補佐員）、原旧姓新谷）多賀子

2. 調査にいたる経緯と調査経過

平成9年1月、徳島大学工学部地区における総合情報処理センター・大学院独立専攻学科等の合築建物が平成8年度の補正予算によって建築されることとなった。当時は医学部付属病院の共同溝関連調査を実施中であり、埋蔵文化財調査室職員全員が発掘調査に出ていた関係上、別件に割ける余力がなく、調査時期や体制を巡っては関係者相互で数回の協議がもたれた。2月に開催された埋蔵文化財調査委員会において、当埋蔵文化財調査室の担当のもとに本調査を実施することが正式決定されたが、設定された調査期間には余裕がなかったことや、予期せぬ高密度の遺構密集地帯で調査期間が当初予定を大幅に超過した光応用工学科棟の隣接地であること、また一方では共同溝調査に支障が生じる可能性も指摘されるなど、本調査を実施するにあたっては不安材料ばかりが目立った。

当面は北條芳隆を主任、上田淑子を補助員として調査に臨むことになり、それに加えて、徳島大学大学院修了生原（旧姓-新谷）多賀子を業者雇いの補佐員として採用し、調査担当職員の充実をはかった。施工業者は岡田組・木内組（現場代理人金子博）である。

調査は3月28日に開始し、重機掘削で造成土を除去したのちに、4月上旬からは人力掘削によって明治期の水田耕土層以下を順次掘り下げていった。遺構面は3枚を想定した。しかし調査を進めるにしたがい、区の中央を堺にして遺構密度は極端に異なることが判明してきた。調査区の東側一部には遺構の密集地域が認められたものの、西側半分は耕作痕跡が数枚にわたって検出されただけで、それ以外の構築物跡はごく少数であった。そのため、調査の日程上は幾分か余裕が生じることとなり、当初の不安要素は概ね解消される格好となった。

なお第3遺構面の調査にあたっては、上屋工事の施工業者浅沼組の厚意により、湧水対策としてウェルポイントを設置することとなり、5月下旬に設置工事を実施した。これによって調査の能率は格段に向上し、従来は調査不可能であった海拔マイナス50cmまでの遺構の処理が可能となった。

調査区全体の遺構の処理が終了したのは6月7日、当初予定を若干短縮させて6月10日には全作業を終えた。

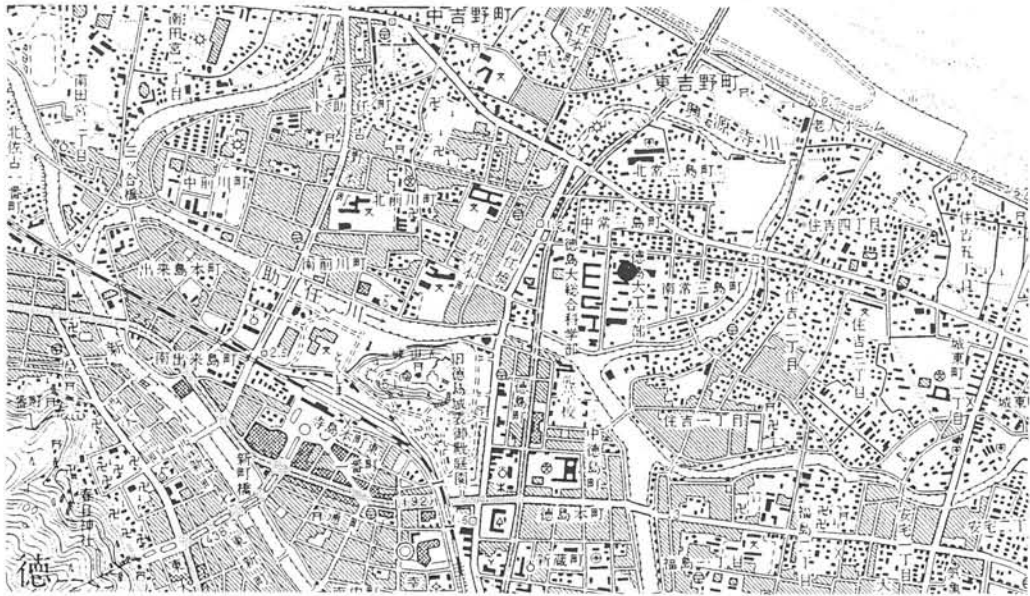
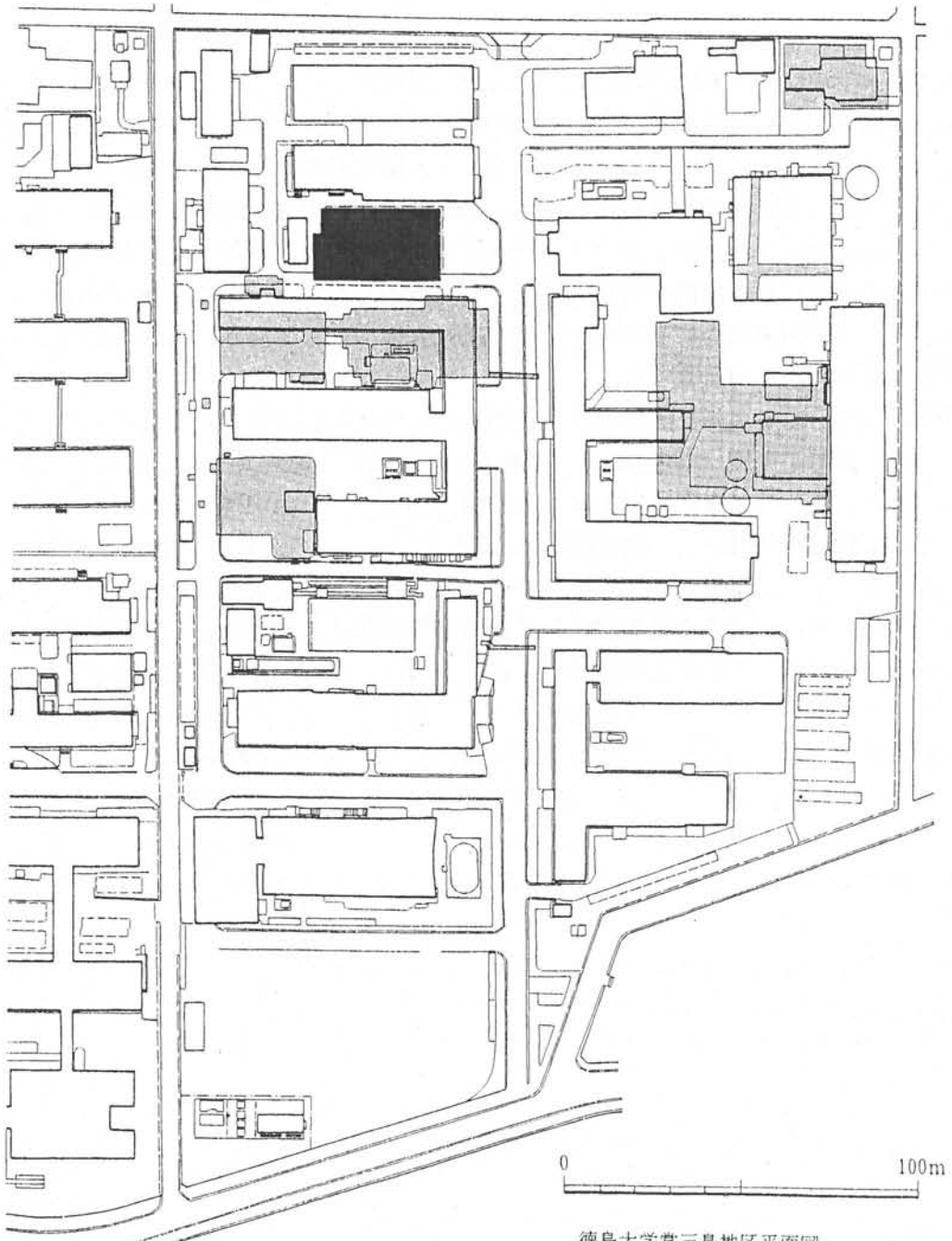


図1 遺跡の位置



徳島大学常三島地区平面図

図2 調査地の位置

3. 調査成果

(1) 遺構

今回の調査では屋敷の境界を区画する溝や土手、建物跡の一部、畑地・井戸等を検出した。

区画溝と土手 (SD01、SD04、図版-1上段)

区画溝としては調査区の中央を南北方向に伸びる2条が、また調査区の中央部付近で先の2条に取り付く東西方向の2条の溝の合計4条が検出された。このうち南北に伸びる東側の1条は、光応用工学科棟の調査において検出されたSD03に対応し、一連のものである。またこれら2条の溝の間には、均質な暗黄褐色のシルト層が堆積しており、この間は無遺物・無遺構であるため、本来はこの場所に土手が盛り上げられていたものと推定した (SA01)。

なお、これら区画溝は18世紀後半に掘削された後、19世紀代には大規模に再掘削されているが、掘削位置には数10cmのズレを生じている。

これら区画溝が確認されたことによって、本調査区は3軒の武家屋敷に当たることが再確認された。江戸後期の絵図によると調査区の西側一帯は長谷川家、東側のうち北半は別の長谷川家、南半は牧家の各屋敷地となっていたようである。

建物跡 (図版-2上段)

調査区の牧家屋敷該当地区において、建物の柱穴群が検出された。層位は第1遺構面である。柱穴は直径60cm、深さ20cm程度の土坑を掘り込んだ中に、礎盤としての角礫 (結晶片岩—通称青石) を敷き詰めたものであり、礫敷きの上面は浅いすり鉢状を呈するものが目立った。この上にさらに礎石を乗せたのか、直接柱を乗せたかは不明であるが、構造的にはより簡略な方の後者の場合を想定したとしても、十分に丁寧な作りの基礎である。出土層位からみて、所属年代は幕末期であろうと思われる。

畑地 (図版-1下段)

南北に伸びる区画溝の西側一体には、第1遺構面から第3遺構面までの間に、鋤痕が高密度で検出された。この他には浅い溝が2・3認められた程度で、鋤痕以外の遺構密度は極めて低い状況であった。遺物もごくわずかの陶磁器類の細片が見受けられるにとどまり、周辺一帯は耕作地であったことを如実に物語っていた。水田耕土は明治期の堆積層に認められただけで、それ以下の層位では未検出であったことをみると、江戸期 (第1遺構面から第3遺構面までを通じ) には畑地であった可能性が高い。絵図との比較作業によっても、本調査地は長谷川の裏庭にあたっており、調査所見との矛盾はない。この場所は当家屋敷内の菜園であったと考えられる。

井戸 (SE01, SE02, SE03, SE04)

明治期の井戸2基と江戸期の井戸2基を発見した。このうち明治期の井戸は、円形の土坑内に竹編みの簡単な井戸枠を設けたもので、中央部に長さ2m程度の竹筒を垂直に差し込み、湧水管としている。湧水は土坑内に溜められたのち、土坑の南側に設けられた土管内を通じて南側へと導かれたようである。これらの土管列は調査地のさらに南側へと伸びており、終点の状況は不明である。そのため、これが土坑内に一定量以上の水を溜めないための排水施設なのか、あるいは井戸の南側の耕作地へと水を導く農業用水路であったのか、どちらとも判断しきれなかった。これに対し、江戸期の井戸2基のうちの1基は土坑内部に石組みの井戸枠を設けたもので、比較的丁寧な構造であった。ただし堆積土や埋土の状況を見ると、ごく均質なシルトが主体で下層に有機質の遺物類も含まれてはならず、長期間の使用があったとはみなしがた

い (SE04)。残りの1基は素掘りの井戸 (SE03)であった。

竈 (SK50, 図版-2中段)

第2遺構面において検出された。幅45cm、奥行き85cm、検出面からの深さ15cmで、焼土の広がりをみると、炊き口は東側、西側半分が焼成部であったと推定される。先の建物跡とは平面的に重なるが、層的には本例が下層であり共伴関係にはない。第2遺構面において建物跡の検出はなかったので、屋外に設置された竈であろうと判断した。

ゴミ穴 (SK55ほか多数, 図版-2下段)

ゴミ穴は各所から発見された。平面長方形ないし不整楕円形のもが多く、内部には多数の陶磁器類、瓦類、有機質の遺物が廃棄されていた。その大多数は日常ゴミの廃棄穴であったと推定されるが、なかにはカンナ屑とおぼしき木の剥片が多量に廃棄されているものもあり、建物の立て替えに伴う建築ゴミの廃棄穴と推定されるものも含まれているようである。

(2) 遺物

出土遺物には多量の陶磁器類・漆製品類・古銭などがあり、このなかには蜂須賀家家紋入りの漆椀や投網の垂作製の鋳型、一分金など、特筆すべき遺物が含まれている。このうち漆椀にかんする現時点での所見を報告することで報告に代えたい。

漆椀の出土位置・発見時の状態 (図版-3上段)

牧家の裏庭に掘られた幕末期 (19世紀中頃) のゴミ穴中から発見された。磁器類の破片などと一緒に見つかり、本品は斜めに傾いた状態で埋まっており、地中に埋納するなどといった特別な配慮があった形跡はまったく見受けられなかった。ゴミとともに投棄されたものと考えられる。以上、出土状況からは、牧氏による幕末期の廃棄品であることと、他のゴミと同様の扱いであった事実が確認された。

土圧のために表面の一部には亀裂が入り、100年以上土中に埋まっていたために漆膜の内側にあるはずの木質部も風化して空洞化してはいるが、それ以外の損傷はみあたらないことから、投棄時には完全な形であったと推定される。ただし蓋とセットになるはずの椀の身本体は見あたらなかった。

漆椀 (蓋) の特徴

口縁部の直径12cm、高さ5cm、赤漆塗りの仕上げを行ったのち、金蒔絵と金箔押しで装飾を施している。装飾文は高台の縁の部分に金蒔絵を施し、身の三方および高台上面に「五三の桐」と「丸に左卍」の家紋を金箔押し技法で施す。桐と左卍はともに蜂須賀家 (阿波藩主) の家紋であり、両者の組み合わせによって蜂須賀家の所用品であることを表現することがしばしば見受けられるため、本例は蜂須賀家が特注した椀であるとみて間違いはない。なお、本例と同一の手法で制作され、家紋も同一規格とみられるお椀や酒器などの漆器類が伝世品としていくつかが知られていることからみて、お椀や酒器類など、お膳を飾る揃いの器類がある時期に一括制作され、何組かのセットとしてあつらえられていた可能性が高い。本例と酷似した品としては堺家蔵品 (堺屋弥蔵が徳島城下にて明治5年に購入一金百匹) がある。仕上げは非常に精巧で丁寧な作りであるためであろうか、土中にあっても保存状態は極めて良好である。

4. 出土遺物の総量

出土遺物の総量は次のとおりである。これらの遺物は徳島大学埋蔵文化財調査室で保管中であり、今後整理を実施したうえで、文化遺産としての活用をはかりたい。

陶磁器類	コンテナ	107箱
瓦類	コンテナ	42箱
木器類	コンテナ	10箱
石類	コンテナ	1箱

5. まとめ

今回の調査成果として第1に指摘すべき点は、武家屋敷裏庭の菜園跡が確認されたことである。推定面積は1000㎡以上である。本学での従来の調査においても同様の菜園跡は検出されてはいるが（機械工学科棟）、幕末期から明治期にかけての限定された時期のものであり、武家屋敷の廃絶から農地化へと至る過渡期の状況を示すものと解釈される性格のものであった。それに対し今回発見されたものは、江戸期の全般を通じて安定的に菜園として利用されたことを示す遺構であり、その性格は武家屋敷の構造の基本に係わるものと位置づけられよう。

武家屋敷の建坪率が一般に低いことは、すでに各方面から指摘されてきたところであるが、宅地内部における菜園の占有面積が相当広いといった事実は、建坪面積だけを問題にした従前の把握の仕方が一面的でしかないことを気づかせるよい機会となった。広大な面積を菜園として宅地内に囲い込む意図が当初から働いていたことを強く示唆するものである。このことは、徳島藩の武家層が甘受した消費経済活動—基本的には自給自足であったとされる（徳島城博物館長福原氏教示）—の問題とも密接に関連し、その実態解明に大いに役立つ物的証拠を提示した点で、今回の発見は重要な意味をもつ。また視覚的には、武家屋敷の空間利用の実態を具体的に把握しえた点でも貴重な成果をもたらした。

成果の第2点めとしては、蒔絵漆碗の発見がある。藩主蜂須賀家の家紋入りの品物が中・下級武家屋敷内のゴミ穴に廃棄された状態で発見されたのであるから、遺物自体の希少さや文化財的価値のみが重要なのではなく、その特異な出土状態を含めたコンテクスト全体の解釈が、藩政末期の武家層の動向に深く係わる可能性をもつという点においても特筆すべき重要性をもっている。

層位関係や絵図から判断して、本漆碗を所有し廃棄した主体者が牧家であることはほぼ確実であろうと思われるが、いかなる事情で入手したのか、またどのような経緯で廃棄に至ったのか、解明すべき課題は多い。ただし本漆碗が蜂須賀家伝来の調度品であることをみると、入手の手段は藩主からの拝領という形態をとった可能性が濃厚である。また廃棄にいたる経緯については、時期的に藩政の解体期にあたることから、藩の権威の喪失、武家社会の崩壊、といった要因が作用した可能性を考慮しておきたい。藩士が藩主由来の物品を廃棄するに至った背景としてまず想起されるのは、藩主の威光の急速な失墜があった場合ではなかろうかと思われるからだ。

実証的な検討は今後にゆだねられるが、上記のような視点に沿って事実関係を解きほぐすことにより、内容豊かな近世・近代史を描きうる格好の素材であると期待される場所である。

成果の第3点めとして特筆すべき点は、漁網錘の鋳型の出土である。本学の調査では通算3例めの出土になるが、今回の出土によって、常三島在住の武家層が盛んに投網漁をおこなっていたことはほぼ確実となった。吉野川で投網を打つ一方、屋敷内で網を繕い錘を鋳造する藩士の姿を想像すると、彼らの日常生活の一端を垣間見るようで興味がつきない。



図3 武家屋敷裏の菜園（想像図）



図4 遺構配置図



調査区の全景
(第1遺構面一東から)



調査区東半部 (俯瞰)



調査区西半部の耕作痕跡
(南から)



第1遺構面
建物跡（柱穴）



第2遺構面
竈跡（SK50）



第2遺構面
ゴミ穴の状況（SK55）



蒔絵金箔押しの漆碗
出土状況（第1遺構面）



投網用錘の鋳型
出土状況（第1遺構面）